

もう一度会いたい

裾野市内中学校

八木さん

私の父は鳥が好きだ。中でも特に猛禽類を好む。猛禽類とは、狩りをするために視力や脚力が発達し、口ばしや爪は強く、鋭く成長する鳥のことを言う。大きくは鷹とフクロウの仲間に二分されるが、私と父が観察するのは前者の仲間である。

私と父は、よくそのような猛禽類を探しに出かける。私たちが猛禽類を観察する主なスポットは、家から車で三十分ほどの場所にある田畑の広がる野原だ。田んぼや畑の脇には透き通った水が絶え間なく流れていて、春には赤紫色のレンゲの花が咲き、秋には小道に黄色いイチヨウの葉のカーペットが敷かれる、とてもきれいな所だ。川や畑の周囲にはたいていカモやハト、ネズミなどが生息している。だから、それらを捕食する猛禽類も見られるというわけだ。日本に生息する猛禽類の多くは毎冬、同じ場所に飛来する渡り鳥でもあるため、決まってこの場所に行くのが私たち親子の冬の楽しみだった。

だが、私たちが数年間通ううちに、見られなくなった猛禽類がいる。オオタカだ。通い始めたころには獲物を食べたり、小道を横切る姿が

見られたが、昨年は影すら見えなかった。オオタカは父の大好きな鳥であり、野原の王者と言える存在でもあったため、彼らを見られなくなったのは本当に残念だった。

オオタカが飛来しなくなった理由について私が考えた仮説を述べたい。一つ目は、気候変動による影響、特に地球温暖化だ。この影響はオオタカが飛来していた野原でも着実に見られる。最寄りの気象観測所における年平均気温が、ここ九十年間で二度も上昇しているのだ。また、ヨシキリ、イワツバメ、アマサギなどの夏鳥の飛来時期がここ数年間で一ヶ月ほど早まっている。温暖化は、間違いなく渡り鳥の飛来行動に影響を与えていることがわかる。

二つ目は、人間の活動によるストレスだ。オオタカをよく見かけた並木道で、ある年、水道管の工事が数年間行われた。同じ野原では、毎年イワツバメの群れの飛来も確認でき、トンネルの中で子育てをしていたのだが、そのトンネルの工事が行われてからは、確認できるイワツバメの個体数が減ったり、全く見られない年もあった。同様のことがオオタカにも起こっている可能性は十分に考えられる。

全ては私の仮説でしかなく、オオタカの飛来が見られなくなった本当の理由はわからない。しかし、人間の存在や生活が彼らに何らかの影響を及ぼしているのは確かだと思う。一度飛来をやめてしまったオ

オオタカをまたここに呼び戻せるかどうかわからない。でももし戻ってくれたなら、オオタカが生活を始める際に、人間ができることを考えてみた。

まず、オオタカが好む十メートル以上の高木を残す。オオタカが捕食する小動物、ネズミや小鳥から間接的に農薬を摂取することを避けるため、接近する農地では無農薬か低量の農薬使用に努める。人通りの少ない場所であれば、繁殖期は交通規制などができれば安心してヒナを育てられるだろう。また、小さな努力としては、道を歩く一人ひとりが必要以上に草木を踏み荒らして小動物の繁殖を妨げないようにする。観察は遠くからそっと行うことを心掛けたい。少しずつでも、できることは何でもやろう。だから私は、せめてこれから、毎年野原の様子を記録しようと決めた。具体的には、草木の高さ、量、川の水量、月毎の平均気温などの野原の環境の記録だ。これらの記録と、猛禽類の飛来時期を照合することで、野原周辺の環境が彼らにどのような影響を与えているのかを、明確にすることができよう。

最後に、父だけでなく、私自身がオオタカの飛来を切望する理由について述べておきたい。彼らオオタカは、あの野原に飛来しなくなっただとしても、私が気にしなくてもそんなことに関わりなく、もっと暮らしやすい別の野原を見つけているかもしれない。しかし、も

しオオタカ以外の猛禽類の飛来まで途絶えてしまったらどうなるだろう。彼らが捕食するはずの小動物は増殖し、農作物を荒らす。そうなれば、自治体は害鳥、害獣に指定し、駆除されてしまうかもしれない。人間の生活によってオオタカが消え、次にはカモやネズミが消える野原を想像すると、とても寂しくて悲しい。観て楽しいだけではない。オオタカの存在自体が人間にもメリットがあるのだ。猛禽類が人間に協力する意思がないとしても、共存のために人間が考え、お互いの存在が必要と供給のサイクルを満たすようにしていかなくてはいけない。私たちがほんの少し、オオタカの生活のために配慮するだけでできるとこの願いは叶うはずだ。

あの野原で、私は、もう一度オオタカに会いたい。